「第 5 回 手取川水系流域委員会」の審議結果（議事要旨）について

去る、平成 17 年 6 月 28 日（火）に、金沢市内で『第 5 回手取川水系流域委員会』が開催されました。会議では、事務局から『手取川のこれからの河川整備』と『関係住民意見の把握の意見把握の手法』について報告があった後、各委員による審議が行われました。主な意見は次のとおりです。

出席委員：以下 13 名（11 名欠席、敬称略・専門分野別五十音順） 印は会長

氏 名	専門分野	所 属
辻本 哲郎	河川工学	名古屋大学大学院 教授
玉井 信行	河川工学	金沢大学大学院 教授
富樫 一次	自然環境(昆虫類)	石川県ふれあい昆虫館 館長
中村 浩二	自然環境(生態学)	金沢大学自然計測応用研究センター 教授
中村 正博	自然環境(鳥 類)	日本野鳥の会石川支部 副支部長
野崎 英吉	自然環境(哺乳類)	石川県環境安全部自然保護課 課長補佐
古池 博	自然環境(植 物)	石川県地域植物研究会 会長
中川 耕二	地下水・地質	北陸地盤工学研究会 前会長
藤 則雄	地下水・地質	金沢学院大学 名誉教授
池本 良子	水 質	金沢大学大学院 助教授
永井 隆一	地域社会	石川県砂防協会前会長
山崎 正夫	地域社会	手取川流域開発期成同盟会前副会長
長谷川孝徳	歴史・文化・文芸・教育	石川県立歴史博物館 学芸専門員

欠席者

佐野 修	自然環境(魚介類)	いしかわ動物園 飼育第二課長
村島 和男	農業土木	石川県立大学 教授
吉田 武雄	農業水利	石川県土地改良事業団体連合会 副会長
鹿島 博史	エネルギー	北陸電力(株)石川支店 技術部長
宮崎 光二	内水面漁業	石川県内水面漁場管理委員会 会長
西田 耕豊	地域社会	石川県治水協会会長、川北町長
高澤 基	報 道	北國新聞社 専務取締役
小堀 幸穂	地域経済	鶴来商工会 副会長
平野 俊也	歴史・文化・文芸・教育	水辺の楽校推進協議会委員長、寺井町立図書館長
三田 薫子	歴史・文化・文芸・教育	作 家
米田 満	歴史・文化・文芸・教育	白山地域自然保護懇話会 座長

議事内容

- 手取川のこれからの河川整備について（治水）
- 手取川のこれからの河川整備について（流水の正常な機能維持）
- 手取川のこれからの河川整備について（河川環境・空間利用）
- 関係住民意見の把握手法について

議事要旨

【全体について】

平成15年に策定された『手取川水系河川整備基本方針』に対し、今後の30年間に河川整備計画で実現しようとする目標（手取川の姿）を明確にし、その目標実現の為に取り組むメニューを具体的に記載すべきである。その際に、扇状地河川としての手取川の特質を示し、それをどう保全するのかを明らかにすべきである。

【手取川のこれからの河川整備について（治水）】

本堤と霞堤、暫定堤防と完成堤防の言葉の定義をわかりやすく整理する事。
急流河川対策実施箇所については、200m毎に危険度の評価を行い決定するとの事だが、200mでは間隔が空きすぎ危険な場所が漏れるのではないか。
河道内樹木を伐採する場合、さらに抜根まで実施するかどうかは樹種により具体的に検討すべきである。ヤナギ類の場合には現在伐採したあと、抜根はしない方式を採用し、切り株から萌出する分蘖（ひこ生え）によってヤナギ類の優占を確保した植生管理をしているが、もし、抜根までおこなうと植生の退行化が進んでカナムグラなどが優占することになり、景観的にも良くない。
手取川では、抜根が必要なのは特殊な樹種（例えば、土壌の富窒素化をもたらすニセアカシア＝天狗橋付近に生息）に限られる。
将来、計画的かつ小規模の洪水等によって河道内が、土砂の堆積・移動によって適度に攪乱されるようになれば、カワラハハコ群落やアキグミ群落などいわゆる河原の植生が広汎に維持できることになるが、これが最も望ましい植生管理の形態である。
手取川ダム貯水池の堆砂対策について、具体的な対策を考えているのか。対策の方法によっては、濁りにも影響が考えられるので慎重に検討すること。
西川・熊田川合流点での施設整備にあたっては、施工場所の特徴・歴史的価値等を踏まえた上で実施していくべきである。
霞堤開口部の土地利用の変化によって、霞堤周辺の流れや氾濫域の被災状況がどの程度影響されるか、今後検討する必要がある。
霞堤開口部の土地利用を監視する必要がある。

【手取川のこれからの河川整備について（流水の正常な機能維持）】

河川流量と地下水位の関連性を整理するのならば、河川に近い右岸 1、右岸 2、左岸 2、左岸 3などの地下水位データについてもコメントした方がよい。

流水の正常な機能維持については、正常流量を定めるためにどのような調査を行うかを整理して書き込むべきである。

地下水の使用実績（揚水量）を把握する必要がある。

河川の利用状況や生物等への影響を踏まえ、手取川にとって良好な水質とはどのような状況を言うのか明確にすべき。それを踏まえ手取川の目標水質を定め、目標達成に向けたメニューを考えていくべきである。

大腸菌については、例えば10年や20年のスパンの変動と、その時の流域の状態とどのような関係が見られるといった大局的な動向の判断ができるような調査を実施していくべきである。

【手取川のこれからの河川整備について（河川環境・空間利用）】

文化財の指定基準に『風景』という観点加わった。手取川扇状地は日本でも有数の典型的な扇状地であり、風景の保全に関する検討を行う事。

物理化学的な水質のデータと、実際に観測地点に生息している生物の対応関係が整理できないと、水質データの解釈はできない。水質データに対応する生物モニタリング調査も実施すべきである。

直海谷川からシルトが流出している。その影響で十八河原の石の表面にシルトが溜まりがカ、ヒケ、ヒケを捕食するアコがいなくなった。シルトを除去してほしい。自然環境保全の目標の一つに生物指標を設定し、これに関するモニタリングを行うことを整備計画に盛り込むべきである。

大腸菌については観光客やアコ釣り客の実態と合わせて調査ポイント、調査日（休日と平日）を決めて調査すべきである。

ただ調査を行うという表現ではなく、例えばSSや大腸菌等の問題に対して、原因を特定するためにどのような内容の調査を行うかを明記すること。その上で、「原因を特定して必要な対策を行う」と整備計画に盛り込むべきである。

上・中・下流の砂礫地に棲み分けして繁殖していたチドリ類が、樹林化等に伴って河口のアジサシの集団繁殖地にも入ってきており、状況が変わってきていることを認識すべきである。コアジサシ以外のチドリ類の繁殖地にもなってきており、重要性が高まっている。

アジサシの集団繁殖地は全国的にも少ないので、学習の場としての利用も検討していくこと。

アジサシの繁殖地保護の対策も行われているが、釣り客等が入ってきているので再度検討すること。

環境教育の中で、河川愛護の啓発も必要だが、ゴミの不法投棄や不法係留船等による治水上の悪影響についても環境問題と関連づけて説明すべきである。

手取川は急流であることから上流の亜高山帯・山地帯などの植物種が下流の扇状地域まで流れてきて一時的に生育することや、河道内の植生の森林化の進行から、本来は山地・丘陵の植物種が生育するようになっている場合が認められる。希少植物を保護

する事は大切だが、その植物が本来手取川の河原に生息するものなのか、そうでないのかを把握した上で、保全の必要性を検討すべきである。

【手取川のこれからの河川整備について（河川環境・空間利用）】

関係住民意見の把握の際には、河川整備計画の内容が分かりやすく、かつ誤解を招く事のないよう、公表資料作成にあたっては十分注意すべきである。

以 上

お問合せ先 国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所 調査第一課長 二 俣（ふたまた） TEL 076-264-8800(代) (内線)351